

フィクション劇場 第八話「報治国家」



「  
報  
治  
国  
家  
」  
フ  
ィ  
ク  
シ  
ヨ  
ン  
劇  
場  
第  
八  
話

大  
太  
大

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（お  
おた・だい）と申します。つたない作品  
にご興味を持って頂き、ありがとうございます  
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている事や疑  
問に思っていることなどに対して、「も  
し、こういう設定や条件になったら、当  
事者たちはどう動くのか」を考えたオム  
ニバスドラマです。フィルム・バイヤー  
さんではドラマ部門に全二十五話をまと  
めて公開しており、それと同様に完全著  
作権フリーですので、詳細はそちらをご  
覧下さい。マスメディアに少々風が向い  
ている「性根の曲がった社会派ドラマ」  
で、この第八話はその中から、最近話題  
の新聞関係のテーマを扱った話になりま  
す。では本編をどうぞ。

フィクション劇場 第八話「報治国家」

【登場人物】

直江 将道（なおえ・まさみち）（24）：毎  
朝新聞 新米記者。政治部所属。その後、  
フリーに転身

岡崎 俊次（おかざき・しゅんじ）（24）：  
直江の友人

村尾（むらお）（51）：同政治部 部長

奥村（おくむら）（26）：同政治部 直江

の先輩

杜若（かきつばた）（63）：日本新聞連合

会 会長（毎朝新聞出身）

丸田（まるた）（56）：毎朝新聞社長

谷山（たにやま）（60）：与党総裁

井出（いで）（55）：同 幹事長

種村（たねむら）（53）：同 政調会長

霧島（きりしま）（57）：同 総務会長

フィクション劇場 第八話「報治国家」

東野（とうの）（62）：厚生労働大臣

里見（さとみ）（50）：厚生労働大臣 公

設第一秘書

横内（よこうち）（48）：厚生労働大臣

公設第二秘書

高橋（たかはし）（45）：厚生労働大臣

政策担当秘書

レポーター1

記者1

記者2

記者3

市民（パソコンを見ている）

【あらすじ】

下野していた与党が衆議院選挙で勝利し、2年振りに政権に返り咲く。しかし、前政権が成立させた、大手新聞3社の「社説」での指摘事項を努力義務で実行する「オピニオン法」が施行されることに懸念を抱いていた。そんな中、ジャーナリストを目指す直江将道は、志を持って毎朝新聞社に入社する。

政府は、カスハラ対策の見直しで企業内に専門部署の設置を義務付け、補助金を給付する案を発表するが、社説で対策不足を指摘され、予備費まで使って対応する。

一方、日本新聞連合会会長・杜若の政府の対応を揶揄する発言の動画が流出し、非難の声が高まって、電凸などの攻撃がされる。

直江は友人の岡崎俊次に、このような新聞の在り方に疑問を持ち、フリーの記者になったことを話す。岡崎もそれを応援する。

その後、新聞社は杜若発言への非難を政府の責任とし、社説で改正を求める。

○与党選挙対策本部…開票速報会場（夜）

夜11時頃、与党の開票速報会場。

後にある選挙区と立候補者名が書かれたボード。

総裁の谷山は、笑顔で選挙区の当選議員の名前の上に赤い花を付けるポーズを取る。

マスコミからフラッシュが焚かれる。

× × ×

壇上に、谷山と党三役（井出、種村、霧島）が並んで座っている。

レポーター「谷山総裁、今回の選挙の勝因をお聞かせ下さい」

谷山「やはり、国民のみなさんは内政外交ともに、安定感を求めているからではないでしょうか」

レポーター「今の与党では、それが役不足だったと？」

谷山「いえ、そうは思っていない。今の与党もいろいろな施策を打ち出して、我々も

賛同するところは賛同しました。ただ、何かを変えたり、新しいことをする時には国民の不安を払拭するために、説明を尽くすことが必要になります。それが少々足りなかったのではないかと思います」

レポート「これで、2年ぶりに与党に返り咲きになることが確実にになりました。今後の政権運営については、いかがお考えでしょうか？」

谷山「まだ、開票は続いていますから、まずは結果を最後まで見届けるのが総裁の役目です。それが終わってからお話しさせて下さい」

× × ×

谷山と党三役全員が立ち上がって中央に扇形に集まり、両手を前に出して、握り合いながら、写真撮影に応じている。

○与党総裁室（夜）

フィクション劇場 第八話「報治国家」

4人は応接スペースでこの時にソファ  
ーに座っている。

Ｔ『総裁 谷山』

谷山「ふう、ようやく終わったな」

Ｔ『幹事長 井出』

井出「とにかくにも与党復帰です、谷山さ  
ん」

谷山「ああ、そうだな：」

谷山「しかし、野党の総裁ってのは寂しいも  
のだったな。記者が誰も来てくれない」

井出「以前も、そんな調子だったと聞いてい  
ます。それも今日までですよ、谷山さん」

谷山は一息つく。

谷山「さて、まずは追加公認だな。霧島く  
ん、ウチに入ってくれそうな人に声をかけ  
てくれ」

Ｔ『総務会長 霧島』

霧島「はい。既に何人かピックアップしてい  
ますので、すぐに」

谷山「あと、新人に引っ越しの準備を指示し

フィクション劇場 第八話「報治国家」

てくれ。秘書の人選も併せてな。フォローを頼む」

霧島「分かりました」

谷山「それと、種村くん」

T『政調会長 種村』

種村「はい」

谷山「一番問題なのは、アレだな」

種村「：そうですね」

谷山「向こうがとんでもないものを残してくれたからな」

種村「『オピニオン法』ですね？」

谷村「それ以外に何がある。周知期間が1年あって、施行が来月からってタイミングが最悪だ」

種村「結局、向こうは自分たちに影響がなくなりましたからね」

谷山「そうだ。さっきはテレビの手前、触れないようにしたが、マスコミが政府の政策に首を突っ込める法案なんで、とんでもない」

フィクション劇場 第八話「報治国家」

種村「私もそう思います。対象が毎朝新聞をはじめとした大手新聞3紙の社説の意見のみというのがせめてもの救いです」

霧島「向こうは建前的には、いろんな考えを取り入れようって形を作ったのでしようが、実際のところは、マスコミからの追及を逃れたいのが見え見えでしたからね」

谷山「ああ。政権与党に慣れてないから打たれ弱いんだ。タウンミーティング的な考えが抜けてないんだよ」

霧島「しかし、種村さん。その社説の意見に従うのは努力義務ですから、その辺はうやむやに出来ないのですか？」

種村「法律的に強制力が伴う案は、ウチが断固反対の立場を取ったのでそうになりましたが、法案審議の質疑で向こうが『原則従うものだ』って答弁してます。それを盾に取られたら、言い訳のしようがありません」

谷山「新聞もそれが分かっているから、無茶はしないだろうが、目の上のたんこぶとは

フィクション劇場 第八話「報治国家」

このことだ」

種村「ホントにそうです」

霧島「ウチの党勢が回復したら、真っ先に廃案にしてやりたいですよ」

谷山「まあ、ここは当面乗り切るしかないな。：種村くん、他には何かあるか？」

種村「はい。カスハラ対策強化の法案が5年に一度の見直しに当たっています」

谷山「あれか：。指針を出したのはウチの政権下だったが、あまり改善してないと不評のようだな。これも向こうの政権が怠けていた部分が大半だが：」

種村「そうです。ここは強い対策を打って、向こうとは違うんだ、政策遂行能力があるんだというところを見せるいい機会だと思います。それで、政権基盤を固めたいですね」

谷山「分かった。その辺は厚生労働省の官僚とウチの内部で揉んでくれ。内閣立法にする方向で検討する」

フィクション劇場 第八話「報治国家」

種村「承知しました」

○歩道（朝）

直江が背広で歩道を歩いている。

ラフな格好の岡崎が後から声をかける。

岡崎「直江！」

直江が振り返る。

直江「何だ、岡崎か」

岡崎「何だはないだろ？。今日は決めてるじゃないか」

直江「そりゃそうだ。今から入社式だから

な。お前は？」

岡崎「オレは明後日だ」

直江「ネクタイの結び方だけは練習しとけよ。時間がかかったからな」

岡崎「覚えとくよ。じゃあな！」

直江「あいつ…、大丈夫かな」

○毎朝新聞社…入社式（朝）

毎朝新聞社のホール。看板に「202  
9年度 入社式」の文字。

社長の丸田が登壇して、挨拶をしてい  
る（バックに声）。

直江はパイプ椅子に座って、話を聞い  
ている。

○同 政治部フロア（昼）

政治部の部員が集まっている。

政治部部長の村尾と直江が並んで立っ  
ている。

村尾は直江を手で示して、

村尾「今日から、政治部に配属になった直江  
くんだ」

直江は一礼する。

直江「直江将道を申します。よろしくお願  
いします」

政治部員、拍手。

村尾「じゃあ、当面は奥村くんに面倒を見て  
もらうから。早く、戦力になれるように頑

張ってくれ」

直江「はい」

直江は奥村の方を向いて、

直江「奥村さん、よろしくお願いします」

奥村「こちらこそ、よろしく。まずはパソコン

の設定と記事のデータベースの使い方か

らだな」

直江「はい」

2人は直江の席に向かう。

奥村「ところで、直江くん、今度新しい法律が施行されるのを知っているよね？」

直江「『オピニオン法』のことですか？」

奥村「そうだ。オレたちの記事が政府にダイレクトに反映される。オレはまだ社説が書けるほど偉くはないけど。でも、そう思うと、背筋が伸びるよ。お互いいい記事書かないとな」

直江「そうですね」

○厚生労働大臣 記者会見場（昼）

記者1「大臣、今年でカスハラ法案が5年に一度の見直しになります。どのような形を考えていらっしゃるでしょうか？」

東野「みなさんもご承知のように、カスハラから適切に企業とその従業員を守ることには、従業員の精神的ストレスの軽減と共に業務に支障をきたさないようにして、豊かな働き方を実現することに資するものです。政府は、5年前に法律を改正し、指針を出しました。結果として、悪化はしていないものの、横ばい傾向であります。ですので、今回の改正で大胆な指針の見直しを図りたいと考えております」

記者2「具体的には？」

東野「シフト勤務などで、引継ぎがうまく行かなかったという例なども踏まえ、従業員100人以上の会社にカスハラ対策専門の部署の設置を義務付けることを考えております」

記者3「努力義務ではない、ということですか？」

か？」

東野「その通りです。但し、猶予を3年程度とし、今のところ罰則を課すことはしないつもりです」

○厚生労働大臣室（朝）

東野が座っている。

里見が扉をバンと開ける。

里見が毎朝新聞を握りしめて部屋に駆け込んでくる。

里見「先生、大変です！」

東野「どうした？ 里見くん」

里見「今日の毎朝の社説です。早速、来ました。オピニオン法案件です！」

東野「何だと!? 何と書いてある？」

里見は新聞をテーブルの上に広げて、社説の記事のところを指差す。

里見「政府が企業に対してカスハラ専門部署の設置を義務付けるのであれば、補助金を出すように、と書いてあります」

東野「金か……。ハラスメント対策費全体で確保してある予算でやりくりできないか？」

里見「政策担当の高橋秘書と相談して、関係部署に打診してみます」

東野「頼む。それとオピニオン法対象の3紙を毎日届けさせてくれ」

里見「はい。横内秘書に伝えます」

○厚生労働大臣 記者会見場（昼）

東野「先般、お話ししました企業へのカスハラ部署の設置義務についてですが、企業側の負担も考え、義務付けは従業員1000人以上の約4000社を対象とし、それ以外は努力義務とします。尚、設置義務に該当する事業所には、最大で10万円の補助金を抛出致します（約4億円）」

○厚生労働大臣室（朝）

東野が毎朝新聞を読んでいる。

社説のところで目を見開く。

スマホで里見に電話。

東野（声）「里見くん、急いで来てくれ！」

× × ×

里見は少し息を荒くして、大臣室に駆け込んでくる。

里見「遅くなりました。どうされましたか？」

か？」

東野「どうしたもこうしたもない。また社説だ！」

東野は紙面を指差し。

東野「ここだ！」

里見は新聞紙面を見回す。

里見「どこですか？」

東野「この記事が目に入らないのか!？」

里見は、社説部分を読む。

里見「：政府の施策は不十分である。カスハラは従業員の業務が滞ることを考えれば、設置義務を従業員数の少ない中小企業にまで広げ、補助金を増額する必要がある：」

里見は東野の顔を見る。

里見「先生：、ということとは？」

東野「やらなきゃならんだろう」

里見「しかし、もう予算が：」

東野「：予備費を使うしかない。調書の作成を手伝ってくれ。あと、横内くんと高橋くんには、財務大臣と事務次官への根回しをするよう伝えてくれ」

里見「はい」

東野「特に高橋くんは、うっかりミスが多いから気をつけるように」

里見「はい」

東野「総理には事前に私から話しておく。オピニオン法案件だから、総理からも財務大臣へプッシュしてもらえば行けるはずだ。今週中に閣議決定まで持っていく」

里見「分かりました。すぐに取り掛かります」

○厚生労働大臣 記者会見場（昼）

東野「カスハラ対策での専門部署設置義務の

対象事業所についてですが、従業員1000人以上から、10人以上に、補助金も最大10万円から100万円に引き上げることに致しました」

記者1「財源はどうなるのですか？」

東野「予備費より充当する形で、閣議決定を頂きました」

記者2「予算規模はどのくらいになりますか？」

東野「対象事業所が約44万社ですので、予算は約4400億円となります。予備費の約9割になります」

○厚生労働大臣 大臣室（昼）

居るのは、東野、里見、横内、高橋の4人。応接スペースに座っている。

東野はネクタイを緩める。

東野は深く腰掛けています。

東野「全く…、立て続けに来るとたまらんな」

里見「そうですね。今回の件を見て、他の大臣も戦々恐々としていますよ」

東野「世間は どう 見てる？ その辺が気になるが：」

里見「概ね、好意的です。こちらとしては言ってみれば頭ごなしですから、釈然としません。法律ですので飲み込むしかありません。ただ、やりすぎだという声も少なからずあります。なぜ、新聞のいうことだけ優先的に聞くんだと。あと、党内からもかなり不満が出ていると聞いています。議員立法より新聞に頼んだ方が早いんじゃないか？ という恨み節も聞こえてきます」

東野「まあ、そうだろうな：。野党は？」

里見「自分達で作った法律ですから、表立って異論は出ていないようです。こちら野党を攻撃するようなことはしていませんから。結局、作りっぱなしで、しらんぷりですね。マスコミ出身の議員などは、『戻った方がいいかな？』、とか冗談を飛ばして

いるらしいです」

東野「：ここまで来ると、腹が立つというよ  
り、呆れるな：。ツケが全部こちらに回っ  
てる」

里見「おっしゃる通りです」

東野、溜息をつく。

東野「ふう：」

東野「さて、金の話はもう出てこないだろう  
から、指針の内容の話を進めていこうか。

高橋くん、何か考えているアイデアはある  
か？」

高橋「はい、先生。今回、オピニオン法のせ  
いとは言え、幅広くカスハラ担当部署の設  
置が義務付けられることになります。いま  
では、厚労省の「カスタマーハラメント  
対策企業マニュアル」を土台に、各社独自  
に事業所内のルールを作ってきています  
が、対応がまちまちです」

東野「それは、承知している。それで？」

高橋「業界ごとに一定の共通ルールを示すと

「いっこのはどようでしよ？」

東野「横串を通す、ということだな？」

高橋「おっしゃる通りです」

里見「高橋さん、メリットは？」

高橋「例えば、飲食業界なら、このチェーン店では問題がなかった行為が、別のチェーン店ではNGとかになりますと、客からの不満が余計に出てしまう懸念があります。ですので、どこまでまとまるか分かりませんが、こちらからの指針を受けて、業界全体で、その業種にあった個別の指針の策定をしてもらうことを考えています」

東野「なるほどな。他にメリットは？」

高橋「業界でまとめれば、相対的に弱い立場にある中小の対策が決めやすくなります。言わば、上からのお墨付きを受けた対策が出来る訳ですから、心理的な負担も軽くなるでしょう。あとは、業界は違いますが大規模なコールセンターを持っている企業同士とこのも考えられます」

東野「いいかも知れないな」

横内「先生、私も高橋さんの提案はいいと思います。国の広報活動としても、各々の業界に特化した形ならやりやすいと」

東野「分かった、それで行こう」

東野はカレンダーを見る。

東野「今週の金曜日には間に合わないから、来週の火曜日の会見で話すことにする。一度、バルーンを上げないと、世間のリアクションが分からないからな」

高橋「業界の意向も探れるチャンスにもなりますしね」

× × ×

○厚生労働大臣 記者会見場（昼）

東野がしゃべっている絵だけ。

× × ×

○厚生労働大臣 大臣室（昼）

東野と里見、横内、高橋が大臣室の応接スペースで座っている。

東野「会見から一ヶ月経ったが、何か動きはあったか？」

里見「いくつかの業界団体の関係者に話を聞いたのですが、概ね前向きです。特に飲食業界と小売ですね」

東野「客との接点が多いし、近いからな」

里見「ええ。特にコンビニ各社は指針が決まり次第、共通フォーマットのシールを作成して、店舗の入り口に貼ろうかという話も出ているそうです」

東野「今でも一部やっているみたいだが、いい感じだな」

里見「はい」

東野「ところで、コンビニはカスハラ対策で、店員の名札を本名以外にする動きがあったと思うが、この辺も歩調を合わせる感じか？」

里見「そのようです。ただ、全員強制という形はどうかという意見もあるようです」

東野は、椅子にもたれる。

フィクション劇場 第八話「報治国家」

東野「…まあ、個別の考え方もあるだろうかな。こちらからはあまり口出しせずに、状況を見守ろうか」

里見「はい」

東野「…すると、問題はやはりマスコミか…」

里見は、毎朝新聞を机に置く。

里見「…そうなりますね」

東野「せっかくいい流れが作れたと思ったんだが…」

横内「先生。また、社説ですか？」

東野「そうだ」

横内「何かしろって内容ですか？」

東野「いや、今度は何もしいって内容だ。

それに世の中の流れに逆行しとる」

横内「里見さん、どんな話なのですか？」

里見「さっきの話です。新聞は独立性を保つため、業界でのまとまりは拒否する、だそうだ」

東野「一度、TVのBPOのような組織を作

ろうという話があったが、潰れたからな」

里見「ええ。それから：」

横内「まだ、あるのですか？」

里見「コンビニ業界に倣って、署名記事を極力無くすって言うんだ」

横内「何ですかそれは!? やっと署名記事が定着してきたというのに」

高橋「そうですよ。報道する時は匿名はけしからん、実名だ、と言っている割にこれですか!? 退化してるもいいところじゃないですか」

里見「これも社説に書いてあるんだ。：仕方がない」

東野「とりあえず、マスコミには触れないよ  
うな指針を作るか？」

高橋「先生、それでしたら今と変わりませ  
ん。補助金を出すなら、もう少しこちらが  
主導権を握った形にしないと」

東野「それは分かっているが、向こうを説得  
しようとして、逆に社説でやられても困る

からな：」

横内「そうですね。『報道の自由に踏み込んだ』とか言われかねませんし」

東野「：仕方ない。マスコミの件は一旦、ペンディングにしよう。ただし、前回の指針より良くなったことが分かる形になるように、知恵を出しておいてくれ」

三人「分かりました」

○ホール（日本新聞連合会 第83回定例会）

司会「それでは、まず、会長の杜若さまよりご挨拶頂きます」

場内、拍手。

杜若が演壇に立つ。

杜若「みなさん、こんにちは。毎朝新聞の杜若でございます。今年は、私ども日本新聞連合会に取って画期的な法律が施行されました。みなさんもご存知の『オピニオン法』であります」

杜若「基本的に、私ども新聞の使命は権力監視であります。ですが、この法律は前政権からの“強い”ご要望を受け入れたものでございます」

会場内、少し笑い。

杜若「その意図は、政府の政策に対する切れ目のない監視を目的としているものと承知しております。実際、カスハラ対策では、政府案の問題点を指摘し、よりよい形になったと自負しております」

会場内に頷く人がちよちよこ。

杜若「ですが、世論の中には、新聞社の越権行為ではないか、とのご批判があることも承知しております。しかしこの法律は、政府に対し、あくまで“努力義務”を課しているものでございますので：」

会場内、少し笑い。

杜若「どういう形で私どもの意見を政策に反映させるかは、政府のご判断になります。ですので、私どもにも責任があるところのご指

摘はあたらないと考えております」

杜若「今は、私どもの毎朝を含む大手3紙のみですが、個人的にはこれからはもっと多くの新聞社さんに参画して頂きたいと考えております。えー、一部で大手はずるいと言われておりますので…」

会場内、笑い。

杜若「今後も新聞の使命を全うすべく、一丸となって、権力監視と偏りのない正確な報道を推進してまいりますよう」

会場内、全員拍手。

○家でネットを見てる人（夜）

以上の様子を隠し撮りした動画を動画

サイトで見ている（ノートPC）。

動画のタイトルは「【悲報】日本新聞

連合会長 天狗になる」

小声で、

市民「このヤロー、何をのぼせ上がってんだ

… バカにしやがって…」

○居酒屋（どこかの金曜日の夜）

岡崎はステンカラーのコート、直江は  
スーツ。

座敷に座っている。

生ビールを飲みながら、つまみを食べている。

岡崎「直江、久しぶりに飲みたいっていうから来たが、随分よれた格好だな」

直江「ああ。会社を辞めたんでな」

岡崎「辞めた？」

直江「そうだ。今はフリーでやってる」

岡崎「何か、気に入らないことでもあったのか？」

直江「いや、そういう訳じゃないんだが…」

岡崎「じゃあ、なんでだ？」

直江「…入ってから、過去の取材のデータベースを見ながら記事を書く練習をしてたんだが、『こういう結論で書いてくれ』って指示が多くて…。それがしっくり来なくて

な……」

岡崎は生ビールを飲んで、

岡崎「そうか？ 割と普通だと思っけど」

直江は岡崎の顔を見て、少し驚く。

直江「普通？」

岡崎「ああ。オレも部署の予算が100万くらい足りなくなりそうだからって、資料を作らされたことがあるよ。所長と経理を説得するための」

岡崎はつまみを食べながら、

岡崎「結局のところ、100万くれているのが結論だから、いろいろと理屈をこねくり回して作ったけどな。まあ、バレバashedったと思うけど、上も何らしらの理由が欲しかっただろうし……。違うのか？」

直江「オレの方は世間に出るんだ。そんな内輪の話とは違うよ。オレの考えるジャーナリズムと、違ってたってこと」

岡崎「結論ありきってところがか？」

直江「そうだ。取材内容を吟味して結論を出

フィクション劇場 第八話「報治国家」

すのが当然だろ？ でも結論が決まってい  
たら、それに合った取材内容しか選べな  
い」

岡崎「まあ、お前らしいっちゃらしいが……。  
政治部に居たんだよな？ じゃあ、フリー  
で政界のスクープみたいなのは取れそうな  
のか？」

直江「いや、難しい。『記者クラブ』っての  
に入らないと不利なんだ」

岡崎「そうなのか。クセ強の煙たがられてる  
ヤツは？ よく見るが……」

直江「アレはフリーだけど入ってる」

岡崎「あの、よくわめきちらかしてるヤツも  
か？」

直江「入ってる。アレはフリーじゃないけど  
な」

岡崎「でも、記者会見くらいなんだろう？

その『記者クラブ』ってのは。そんなに重  
要なのか？」

直江「ああ。プロ野球に『番記者』ってのが

いるだろ？ 特定のチームに張り付いて取材している記者。それと似てる」

岡崎「どの辺がだ？」

直江「番記者はチームに顔売って親しくなって、情報を貰ってそれを記事にする。だから外から見ているよりも内容の濃い記事が書ける」

岡崎「そうらしいな」

直江「『記者クラブ』ってのは、番記者の集まりみたいなものだ。チーム、つまり権力側と親しくなって情報をもらう。だが、マスコミの使命は権力監視だ。なのに、逆のことをしてるように思えてな。それなら無理に……って感じだ。会社にも同じようなジレンマを抱えてる人もいたよ……」

岡崎「……まあ、誰でも嫌なヤツとか知らないヤツには情報を渡したくないからな」

直江「そういうこと」

直江はビールを飲む。

直江「なあ、岡崎。お前最近オピニオン法で

フィクション劇場 第八話「報治国家」

揉めてるの知ってるよな」

岡崎「ああ、知ってる。日本新聞連合会長の態度が何様だって話だろ？ 例の3つの新聞社に電凸かましてるらしいな。毎朝は質問フォーマットのみで、返事をしない場合もありますとか書いてあるから、余計にネットで燃えてるって話だ。だから、販売店に電凸してるらしいし。デモしようとかSNSで呼びかけてて、実際2、3回やったって話は聞いたな」

直江「そうだ。オレはそのデモの取材に行っただが、どこにも載せてもらえなかったよ」

岡崎「でも、カスハラ対策自体は、悪くは無かったと思うけど…」

直江「そうだ。だが、新聞は誉めていない」

岡崎「？」

直江「学校教育だと『誉めて伸ばすのはいいことだ』とか言っておいてな」

直江「それに、何か制度を変えたり、追加すればどこかに歪みが出てくる。他に全く影

響がないなんてありえない。その揚げ足取りをしてもしょうがないだろ？ 『さすが政府、今回の政策で今までより良くなった。グッジョブ！』って言えないのかなと思っ  
ってさ：」

岡崎「そりゃあ、割を食った方から見れば、この野郎！ ってことになるからだろ？」

岡崎「そういうことになっているのかどうかを監視するのがマスコミの役割じゃないのか？ いわゆる『知る権利』の行使ってヤツで」

直江「…岡崎、その『知る権利』を使って、みんなが一番知りたいことは何だと思ってる？」

岡崎「…政党内部の権力構造とかか？」

直江「いや。一番知りたいのは『マスコミの姿勢』だとオレは思ってる」

岡崎「姿勢？」

直江「そうだ。オレは、マスコミは中立・公正でなくてもいいと思っている。偏ってい

るなら堂々とその立場を示せばいい。けど、無理やり中立・公平の形に持って行こうとするからよく分からない理屈が出てくる。『知る権利』を行使する前提は、知らせる人たちに信用されてこそ、だろ？

『人の事は知りたいたいけど、自分たちの事は知られたくない』じゃあブラックボックスだ。それで私たちが信じて下さい、じゃあ通らないだろう？」

岡崎「そう言われれば、そうだが……」

直江「だから、オレはフリーを選んだ。これからオレが書くものは、オレ自身がこれに示さないといけないと判断したものである。偏っているかも知れないし、批判もあるかも知れない。でもそれは、全部自分の責任で上等だと思っている。新聞みたいな後ろ盾もない。自分の信念で書く。もちろん他に迷惑をかけちゃいけないが……」

岡崎はニヤツとする。

岡崎「あいつみたいにか？」

直江もニヤツとする。

直江「そうだ！」

岡崎は少しのけ反って、

岡崎「直江、書いたものがまとまったら、オシに送ってくれよ。：一番最初に読んで、ケチつけてやるからよ」

直江「ああ：、頼むよ」

○厚生労働大臣 大臣室（朝）

東野が毎朝新聞の社説を読んでいる。社説を見て、驚く。

そこに、新聞を持った里見と高橋が入ってくる。

里見「先生！ 見ましたか？」

東野「見た！ 早速、高橋くんと一緒に準備に取り掛かってくれ！ 総理には私から直接、話をする」

里見と高橋は、部屋を出る。

東野は、総理に電話をかける。

東野「総理ですか？ 東野です。今日の毎朝

お読みになりましたか？ お持ちですか。  
その件で。はい、伺います」

東野は部屋を出る。

東野の机の上に毎朝新聞が広げてある。

社説部分の後半には、以下のように書かれている。

○社説（毎朝新聞 紙面）

「：一部の市民から、オピニオン法対象の各新聞社に対し、政府の政策に強制力を持たせ介入をしているとの声が挙がっている。しかし、各新聞社・社説の掲載内容の政策への反映は、あくまで政府の努力義務の位置付けであり、この認識は誤まっている。

この誤った言説がネットを中心に拡散され、各新聞社及び、その販売店にカスハラとも言える行為がなされている。にも関わらず政府は報道機関全体への誤解を解消する効果的かつ十分な対策を現在も施しておら

フィクション劇場 第八話「報治国家」

ず、放置していることは、大きな問題である。また、周知期間が1年あったにも関わらず、同法の意義や効果などについて、政府から国民に対し十分な説明がなされていなかったことも大きな要因の一つである。

これらの報道機関に対する行動は、言論の自由が萎縮されるだけでなく、引いては報道の自由を脅かしかねない暴挙であり、これは政府の怠慢によって引き起こされたものであると言わざるを得ない。

よって、政府に対し報道機関への誤解と偏見を生まないような形で同法の改正を求めらる。

尚、我々報道機関は報道の自由と国民の『知る権利』を守り、引き続き国家権力の監視に邁進していく」

E  
N  
D

(2025年6月15日 初出)

(2025年9月4日 単話アップ)